「主の僕」　　（障がい者週間）　　２０２２年１１月１３日

コリントの信徒への手紙４：１～１３

佐々木佐余子

「コリントの信徒への手紙」を読むと、その当時の信徒の皆さん方の信仰上の悩みや喜び、悲しみがじかに伝わって来て一体感を覚えます。パウロの使徒としての喜びや悲しみは、今の牧師に通じるものがあるし、コリントの信徒の悩みは教会に行っている人たちすべてに通じるのです。如何にキリストの教会を立ち上げるのが難しいか、そしてこの地上には完全な教会などどこにもないと思わさせられます。しかし、主はそれでも、「わたしに従って来なさい」と仰せになっておられるのです。あなたの有りのままで有るがままに、弱さを持ちながら「わたしに来なさい」と言われます。そのようなことを覚えつつ、今朝も主のみ前にお一人びとりが招かれておりますことは感謝です。パウロ先生は木で言えば本当にザクロのように腹を割って率直に嘘偽りなく話します。ザクロは熟すると実の粒粒が見えます。もし、手紙に良いことばかり書いてあり信徒たちが皆模範的な人たちだとしたら、後代の者は何を学べるでしょうか。読むたびに劣等感を感じ読みたくなくなるのではないでしょうか。手紙は良い教材ですね。私が聖書を好きなのは、本当の人間のことが書いてあるからです。前に、ある宗教の新聞を読んだら、1人の人をほめそやし称える記事ばっかりでうんざりしたことがあります。書かれた人は恥ずかしくないのかしら、と思いました。聖書はたとえ指導者でも使徒でも失敗はそのままです。そこがいいのです。私たちは先代のクリスチャンたちの受けた数〃の試練を通して学んでまいりたいと思います。

4章全体でパウロが主張したいことは、キリストの使徒とは何ぞや、ということです。使徒はキリストに仕える者であり、神の秘められた計画を委ねられた管理者であると言います。1節「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです」と言っています。パウロは簡単に言っていますが身が震える思いで読みます。「神の秘められた計画を委ねられた管理者」という意味は分かりやすく言うと、使徒は、神の家である教会を建てるための監督者であり、大事な神の奥義それはキリストの福音を管理する僕、家来だという意味なのです。使徒は今で言うと広い意味で牧師に当たるのではないでしょうか。ところが、コリントの教会にあって、その使徒が物議を醸しだしているのです。そのことが後半のところ、１３節に現れています。一体どうしてこのようになってしまったのか。コリント教会の内部で信徒たちの高ぶりが生まれていました。3章に幾つかの分派が出て内部が割れていたのです。パウロ派、アポロ派、ペトロ派それぞれ担ぐものが出ていました。これから想像するとコリントの教会は結構人数がいたのでしょうね。有力な指導者のところには人数が集まるのでその人たちは高ぶり、他を見下げるのです。恐ろしいことです。日本でも大教会になるとこういう現象が起こるかも知れません。信徒さんでも有力な方がおられる場合、担ぐ人が大勢いて場合によっては牧師を軽くみなすという現象も起こることがあるということです。この道何十年の人でも、パ

ウロが言うように、まだまだ肉の人もおられるのです。教会は神の国のぼんやりした写しです。でもそこを抑えておかないと教会につまずいて離れていく人もいるのです。3節から5節はパウロの弁明です。パウロのような人でも周囲から批判されたのです。ここには、はっきりとどのような批判なのか書かれていないので不明なのですが、たとえば想像をするとパウロは天幕作りをしているので伝道に本腰を入れていないとか言われた可能性は有りですね。パウロは教会から謝礼を受け取らないので水臭いとか。話がつまらないとか。そういうたぐいではないでしょうか。でもパウロは「少しも問題ではない」と言っているので頼もしいです。牧師によっては鬱になる人もいるらしいです。ある先生が言われていました。「私は今まで幾つかの教会を牧会してきたが、どの教会も完全に出来たところはどこもない」と言われてました。慰められます。パウロは主の来臨を見据えています。「主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます」と言って、その裁きが正しいかどうか、主がご存じであるから、人を裁いてはいけないと教えました。そのようなところが人間離れをしていると感じました。そして、6節後半に「だれも、一人を持ち上げて他の人をないがしろにし、高ぶることがないようにするためです」とあります。コリントの教会は、パウロが開拓伝道をして建てた教会ですが、パウロがコリントを去った後、アポロが来て牧会したのです。そのアポロもコリントを去ると今は、無牧の教会と言うか集会となったのです。使徒不在ですからお互い優劣を競い合うようになりました。牧会者のいない教会は羊飼いのいない群れとなって右往左往するのです。そこで 7 節「あなたをほかの者たちよりも、優れた者としたのは、だれです」とその人に問いかけます。その誇っている人は自分の力があるから皆が付いてくるのだ、自分は褒められるのだ、と思っているのです。でもパウロは全く違う見解です。すべては神からいただいたのではないのか、なぜこのタラントンは神からくださったものだと考えないのか、なぜ自分の才能だと思って誇り高ぶるのか、と言っているのです。誇るとするなら、くださった神を誇りなさい、と教えました。8節を読むと更にこのように言っています。パウロは今、エフェソにいて海の向こうにあるコリントの町の集会にある信徒たちに言っているのです。コリントの集会は今王様がいるらしいのです。そのことをパウロはとても憂いています。キリストの教会ではなく、王様の教会になっている。恐ろしい現実です。「あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。いや実際、王様になっていてくれたらと思います。」 これは恐ろしい言葉で、実際誇り高ぶっている人たちは、もう神の国は来ていると思い、その国で我々は王なのだと勘違いしているのです。使徒たちを出し抜いて自分たちこそ王なのだと思っているのです。9節「考えてみると、神はわたしたち使徒を、まるで死刑囚のように最後に引き出される者となさいました。わたしたちは世界中に、天使にも人にも、見世物となったからです」とあります。これはどのような意味でしょうか。ここには伝道者パウロの悲しみと憤りの心があるのです。おごり高ぶっている者たちが王座に座り、伝道者は悪戦苦闘して働いている。これを見て信徒たちは何もせず傍観し或いは笑っている。コリントの現状はこのような実態だったのです。そのころ、ギリシャには闘技

場なるものがあり、人間と猛獣、牛かもしれませんが格闘し、最後の呼び物として死刑囚が闘技場に引き出されて観衆の前で見世物になる、そのような娯楽があったのでした。多分、パウロも知っていたのでしょう。そのように伝道者も衆人環視の中で戦って見世物になっている、と言っています。悲痛な叫びです。けれど、この章の最後で大変心強いことを言っています。もし、主のお許しがあれば、そちらに行って、高ぶっている人たちの力を見せてもらおう、鞭を持っていくか、愛と柔和な心で行くか、どちらがいいか、と迫って使徒の貫禄を見せています。

ところで見世物という言葉が出てきました。見世物とされた人のお話をしたいと思います。昔、「エレファント・マン」という映画がありました。本当に衝撃的な映画でした。日本語に訳すと象人間です。生まれつきの難病で体が奇形なのです。でも、心はとてもやさしく、知能は普通にありそして、信仰の深い人でした。イギリスのお話ですが実在した人ということです。その人の名はジョゼフ・メリックという名です。彼は 19 世紀に生まれたのですが、出生時は体に何の異常もなかったのですが、次第に病魔に侵され体に異変が出ました。それでも学校を卒業し、仕事をしてましたが、彼が街を歩くと周囲の人たちが恐怖のあまりパニックになり、彼は結局救貧院に入ったのです。しかし、そこでの生活は厳しいものであり、暴力を振るわれたりして耐えがたいところであったのです。彼は自ら見世物小屋のサーカスに入ります。そこで、半人半象エレファント・マンとなって幾つかの町をまわったのです。ある時、見世物小屋でメリックが出ていると、やはり、そこはイギリス何ですね、日本ではとてもこういかないものです。ある外科医の目に留まりました。そして外科医の世話によって、また福祉関係の方が募金を募ってくれてメリックが生活するに十分な住居があてがわれたのでした。最初メリックは大変怖がっていたけれど、少しづつ慣れていき、態度も穏やかになったのでした。そして、ここからが大事なところなのですが、彼は捨てられた聖書や祈祷書を拾って読むようになりました。そして、イギリス国教会の教義を学び、やがて、教会の堅信礼を受けクリスチャンになったのでした。メリックは次第に有名になり、上流階級の人々の関心を引くところとなりました。ところが次第に衰弱し２７歳で天に召されたのでした。最初は恐怖のあまり人々から差別され続けたけれど、理解ある人達のお陰で立ち直って信仰告白をして天に帰ったのです。映画を見て感動したのは詩編２３篇を暗記して祈っている姿でした。「主は羊飼い、わたしには何も欠けるものはない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。」 それを聞いた外科医は驚いたのでした。彼は無知ではない、知能も正常だと考えメリックの支援をしていくのでした。メリックの心情を理解することによって同情が集まり、人々は段々尊敬の念に変わっていったのです。

パウロが見世物にされているというところで、思い出してエレファント・マンの話をしたのですが、今朝「主の僕」という題は少々オーバーな表現でもあり、キリストをあらわす言葉ですが、11 節から 13 節のパウロの言葉がまるで主の僕のように思えたからです。今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、という表

現や侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返している、そして世の屑、すべてのものの滓とされている、という言い方が十字架に掛けられたキリストを彷彿するからです。

私の体験をお話しすると、確か小学生の高学年の頃だったでしょうか、道路を歩いていると、親子連れの２人が通りました。子供は言いました。「お母さん、どうして目の見えない人がいるの。」するとお母さんは言いました。「その人の親が悪いことをしたからだよ。」子供は黙って聞いていました。それからずっと後になって、私は聖書を読むようになりました。そこにはこのように書かれていたのでした。ヨハネの福音書９章「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。』 イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。』」 私は本当に驚きました。「神の御業が現れるため」今までこのように考えた人がいるでしょうか。それから、イエスさまはすごいお方なのだと思うようになったのです。ですから教会に行っていなかったら、ずっと前のお母さんのように考えてその日を暮らしていたかもしれません。

話は変わりますが、ダーウィンという人が人類の進化論という学説を発表しました。ずっと前のことですが、その説では強いものが生き残る、弱いものは淘汰されてなくなっていく、という説です。ところがこの間テレビを見た時、それは驚きの新学説でした。植物の世界での話ですが、木は話さないし、動くこともしない。ただ立っているだけだと思いますが、ところがそうではないということが研究の結果、判明したということです。実験の結果、木は周りの木に信号を送り合図をしている。たとえば、葉を食べられれば、他の木に信号を送り、害虫が来ているから気を付けるように、と知らせるのです。信号を受けた木は自ら毒素をだして身を守るということでした。そして、大木の根は地面の下を張っていてそばに弱い木々があったなら、栄養を与えることもしている、という実験結果があったそうです。強いものが弱いものを守っていることが植物の世界ではあるのです。ですから進化論は100%は信じられないのですね。これからも科学が進んで違った学説が発表されるかもしれません。

今朝は障がい者週間です。イエスさまは弱い人の味方でした。考えれば人は皆、最後はどこか具合が悪くなって体が悪くなり弱い人になります。ですからイエスさまがいつも味方してくださるのです。